

患者として期待するもの

中村 敬

患者さん代表

私は昨年の5月に職場の健康診断を受診し、程なくして精密検査を受けるように言われたことから始まりました。

すぐには原因が判明しなかったのですが、岩手医科大学附属病院に入院することとなり、検査の結果、精巣腫瘍という診断で後腹膜リンパ節まで転移していたことが判明しました。

緊急手術をして、その後は化学療法の治療が始まりました。

副作用については知識として情報収集して覚悟はしていましたし、事前に副作用等についての説明もありました。

化学療法を3クールは最低実施するというので治療を始め、薬剤が投与されて3日～4日目で案の定、吐き気や食欲減退、また、薬の種類によっては熱が出たりしました。

気長に治療を進めていかなければならない病状であり、薬剤が5日間連続投与され、その度ごとに吐き気やだるさとの戦いでした。結局全部で6クールの化学療法でようやく、後腹膜リンパ節廓清術の手術をすることができ、退院して現在は経過も順調です。

このオーダーメイド医療実現化プロジェクトについては、入院期間中にポスターが貼ってあった印象は残っていましたが、何のこともよく分からず、自分には関係ないことのように思っていたのが事実です。

しかし、お世話いただいた岩手医大泌尿器科の藤岡教授から患者の立場からシンポジウムの講演依頼があった時、自分が講演するほどのものでは到底ないのですが、プロジェクト内容をよく読んでみると、21世紀の医療を考えていく上でぜひ実現させてほしいと心から思いました。

生命の設計図としての遺伝暗号が人によって違い、そこから個人個人の患者の体質にあった治療法、診断法、治療薬が開発され、あるいは副作用の軽減や病気予防に役立てるということで、ぜひこの「オーダーメイド医療実現化プロジェクト」を成功させ、病に苦しんでいる患者が一人でも多く、適切な治療等により健康を取り戻してほしいと願っています。

自分の場合は、比較的副作用のダメージは少ない方だと認識していましたが、遺伝暗号の違いから患者本位の薬剤の種類や量が投与され、限りなく副作用も軽減されるならば、患者のQOLの観点からも望ましいことであり、一日も早く安心して医療を受けられる社会になってほしいと切願しております。

講演者プロフィール

1990年 東北福祉大学社会福祉学部卒業後、1990年 岩手県生活福祉部成人福祉課に勤務、1992年 大船渡地方振興局生活福祉部、1994年 厚生省社会・援護局保護課(研修派遣)、1995年 岩手県生活福祉部障害福祉課、1998年 岩手県宮古児童相談所、2002年 釜石地方振興局保健福祉環境部に勤務、現在に至る。